

中世品川のまちと寺社

中世の品川のまちは、大井・品河氏の開発後、南北品川を中心に発展し、鎌倉府の保護の下に、武士や商人を壇越とする寺社が軒を連ね、宗教者、商人、職人、漁業や海運に関わる人々など、多くの住人が集住する都市的な場が形成された。港の繁栄を背景に、禅宗・浄土宗・時宗・日蓮宗など鎌倉新仏教の寺院が競って進出した。大井の地域を真言天台系寺院が占めるのに比べて対照的な様相を呈した。中世では鎌倉の寺院

に直結した清徳寺・海晏寺をはじめ、海蔵寺（荒井道場）・本光寺・妙国寺（現、天妙国寺）・願行寺などの寺院が大きな役割を果たした。中には妙国寺のように寺地の寄進が相次ぎ、七堂伽藍を有する大寺院も出現した。北品川にある御殿山は、かつて海を一望できる小高い丘陵であった。幕末の御台場築造に伴う土取りの際に、14世紀後半～15世紀前半を主体とする板碑が、五輪塔・宝篋印塔・人骨とともに見つかった。江戸時代の桜の名所御殿山は、中世では、極楽往生を願って供養や葬送が行なわれた霊場であった。



▲御殿山出土の五輪塔（左）・宝篋印塔（右）